

## 閉塞性脳血管障害に対する吻合バイパス血管の長期開存に関する検討

Prognostic factors for long term patency of EC/IC bypass in cerebral stenocclusive disease.

日暮 雅一<sup>1</sup>, 中野渡 智<sup>1</sup>, 小野 敦史<sup>2</sup>, 川原 信隆<sup>1</sup>

<sup>1</sup>横浜市立大学大学院医学研究科脳神経外科学, <sup>2</sup>小田原市立病院

背景：脳主幹動脈の狭窄および閉塞に由来するStage2重症脳虚血症例においては、内科的治療に加え、浅側頭動脈-中大脳動脈吻合術(以下STA-MCA)が有効であることが示されている。しかし、側副血行の自然発達による血流改善効果など、バイパス血管以外にも予後改善に寄与している因子の存在も知られている。そこで、STA-MCAの有効性を検証するため、バイパス血管の長期開存の有無をoutcomeとして解析を行った。

方法：2004年4月から2009年3月の期間で、もやもや病を除く、主幹動脈病変に由来する閉塞性脳血管障害に対して、STA-MCAを施行した35例を対象とした。評価項目を、術半年後の血管撮影におけるバイパス血管の開存の有無とした。術直後の血管径との差から、開存群と退縮群に分け、予後因子を比較検討した。

結果：データ取得不十分にて7例除外し、残りの28例を解析した。術直後の血管撮影では、全例でバイパス血管開存を確認した。6か月後の評価では、1例で吻合領域周辺部の脳梗塞を認めた。4例で遅発性バイパス血管閉塞・4例で血管径減少を認めた。2群間での長期開存に寄与する予後良好因子は、術前虚血Stage2のみであった( $P<0.05$ )。

考察：本検証によるバイパス血管長期開存の予後因子は、術後虚血症状再発予防や脳血流改善をoutcomeとした過去の報告の結果に一致するものであった。また、Stage1の中にも長期開存する例があり、Stage1内に手術適応閾値が存在することが示唆された。さらに、遅発性閉塞を来した症例の中には、虚血急性期を乗り越える上でSTA-MCAが有効であったと思われるものもあった。